

# 茨城大学大学院サステナビリティ学教育プログラム

## 修了生アンケート結果

2014年2月28日

茨城大学地球変動適応科学研究機関 教育部会

茨城大学大学院サステナビリティ学教育プログラム（以下サステナプログラム）は、2009年度開始からすでに91名の修了者を輩出しました。そこで、サステナプログラムの改善点と社会的影響を把握するため、このたび修了者を対象とするアンケート調査を実施しました。これまで在校生に対するアンケートは定期的に行ってまいりましたが、修了者に対するアンケート調査は今回が初めてです。

本アンケート調査にご協力頂いた修了生の皆さんに感謝申し上げます。以下のとおり、サステナプログラムは概ね高い評価を受けたと考えられますが、今後も自由記述にあるご意見、ご要望等を参考にしてプログラム運営に生かしていく予定です。

### 結果概要

サステナプログラムの履修全体を振り返って、肯定的に評価した履修生が全体の約9割(23/26件)であった。とくに印象に残っている点は現地でのフィールドワーク(20件：複数回答)や他研究科の大学院生との交流(18件：複数回答)であった。

一方、修了後の職業や進路がサステナプログラムと関連しているとの答えは半数ほど(12/26件)であったが、サステナプログラムの内容が職業・進路先で生きているとの回答は6割を超えた(16/26件)。また、履修の経験は職業・進路のみならず、それ以外での場面でも生かされていることが示唆された(18/26件)。

### アンケート方法

- ・ インターネットアンケート（Facebookでのメッセージおよび電子メールでの連絡）
- ・ 実施期間 2014年1月10日(金)～2月7日(金)
- ・ 対象者 91名（2010年度～2012年度サステナビリティ学教育プログラム修了生）
- ・ 配付数 58名（Facebook49名 電子メール9名）
- ・ 回答数 26名（回答率28.5%）

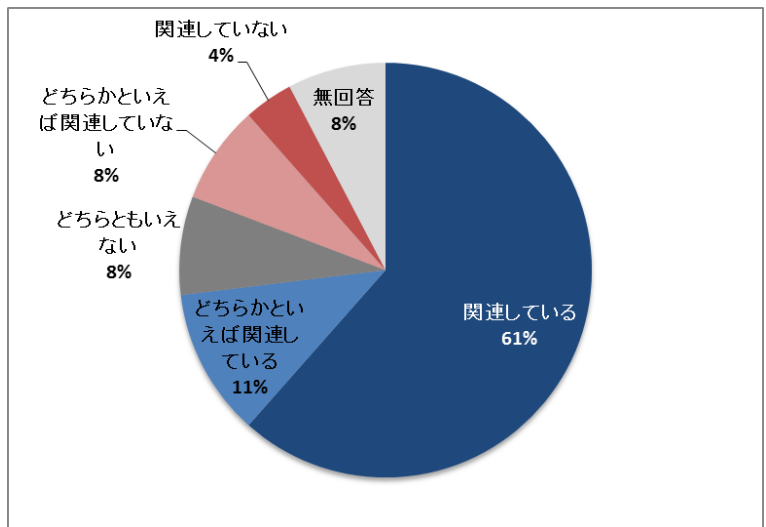
### 回答者の属性

性別		所属研究科		入学年度	
男性	14名	教育学研究科	9名	2009年度入学	6名
女性	9名	理工学研究科(工学系)	7名	2010年度入学	13名
無回答	3名	農学研究科	5名	2011年度入学	4名
		理工学研究科(理学系)	1名	無回答	3名
		人文科学研究科	1名		
		無回答	3名		

## アンケート調査結果の詳細

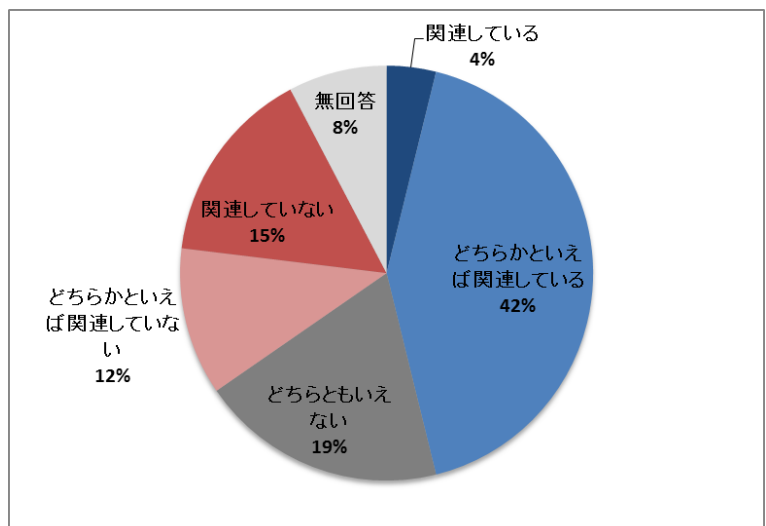
### 問1 現在の職業・進路は大学院での専門教育と関連していますか？

・ 関連している	16名
・ どちらかといえば関連している	3名
・ どちらともいえない	2名
・ どちらかといえば関連していない	2名
・ 関連していない	1名
・ 無回答	2名



### 問2 現在の職業・進路はサステナプログラムと関連していますか？

・ 関連している	1名
・ どちらかといえば関連している	11名
・ どちらともいえない	5名
・ どちらかといえば関連していない	3名
・ 関連していない	4名
・ 無回答	2名

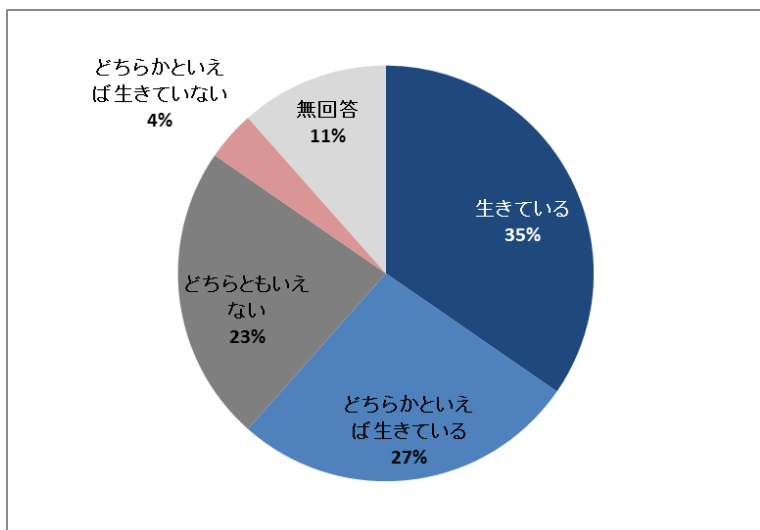


### 問2の自由記述例

- ・ 高速道路建設、保全において、持続可能な構造及び管理を念頭に置いた設計、事業計画が必要なため。また、事業を進める上で、様々な分野の人間の意見、知見を統合する必要があることからサステナビリティ学コースで異分野の人間と関わったことが役に立っていると考えられるため。
- ・ 公共工事において合意形成を図る場合や JICA の方々などと協力する機会にサステナプログラムの中のフィールドワーク(国際実践教育演習)で体験したような場面に出くわすことがある。
- ・ 総合学習で、地域ならではの教育資源(大学・研究・自然・歴史)等を活用しながら、未来を拓く力を身に付けるという活動をしています。
- ・ 着眼点を持続的な開発に置き、地域の特性を考慮しながら地域開発を進めていく点が特に関連が強いと思われる。

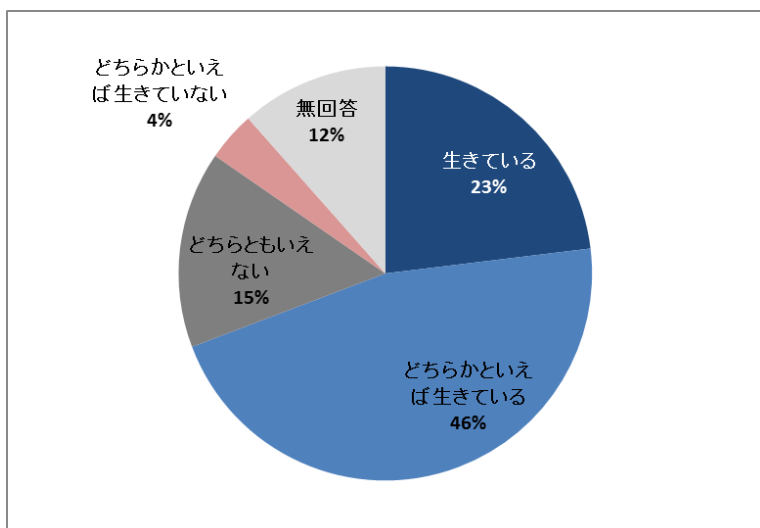
### 問3 現在の職業や進路先で、サステナプログラムでの経験が生きていますか？

・ 生きている	9名
・ どちらかといえば生きている	7名
・ どちらともいえない	6名
・ どちらかといえば生きていない	1名
・ 生きていない	0名
・ 無回答	3名



### 問4 現在の生活（職業・進路先以外の場面）で、サステナプログラムでの経験が生きていますか？

・ 生きている	6名
・ どちらかといえば生きている	12名
・ どちらともいえない	4名
・ どちらかといえば生きていない	1名
・ 生きていない	0名
・ 無回答	3名

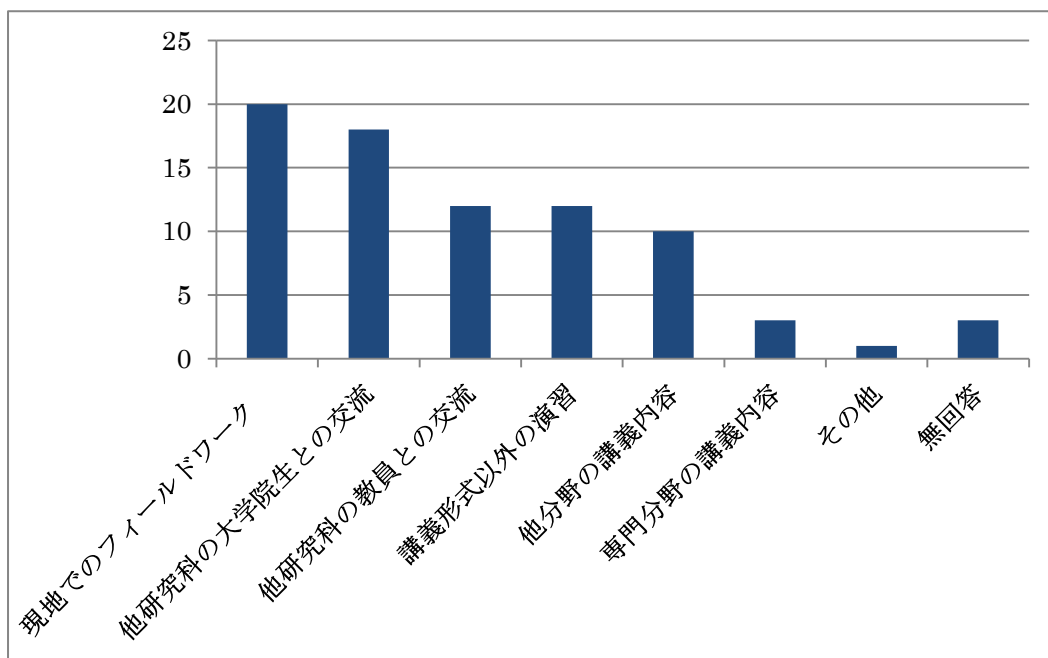


### 問3~4の自由記述例

- ・ 話の幅が広がり、俯瞰的なものの見方が出来るようになったと感じています。単に自身の専門とする分野のみだと知り得なかった事、考えてなかったであろう事は仕事の上でも、日常の何気無い会話や人付き合いに影響を与えています。仕事上で一つの企画などに対して、どういった側面があるのか、どういった見方、捉え方が出来るのかを考えるのは、当たり前の様ですが、それらに関連付ける事総合的にまとめる事は、サステナの様々な講義、演習で得たものの力が大きいと感じています。
- ・ 問3に関しては、他分野の方との意見交換(情報を引き出す力・意思の疎通等)で非常に役に立っていると思います。問4に関しては、海外へ行く機会をいただけたので、その経験が様々な場面で活かしている気がします。
- ・ サステナプログラムに参加したことで、多様な意見や異なる生活習慣および地域の慣習に幅広く適応するための能力が身に付き、海外での生活でも問題なく過ごせている。
- ・ 国際演習で現地の人たちと対話し、色々な意見をもとに対策を考えた経験が沿道住民対応にいきている。
- ・ 多様な考え方があることを意識できるようになり、人に寛容になれた。

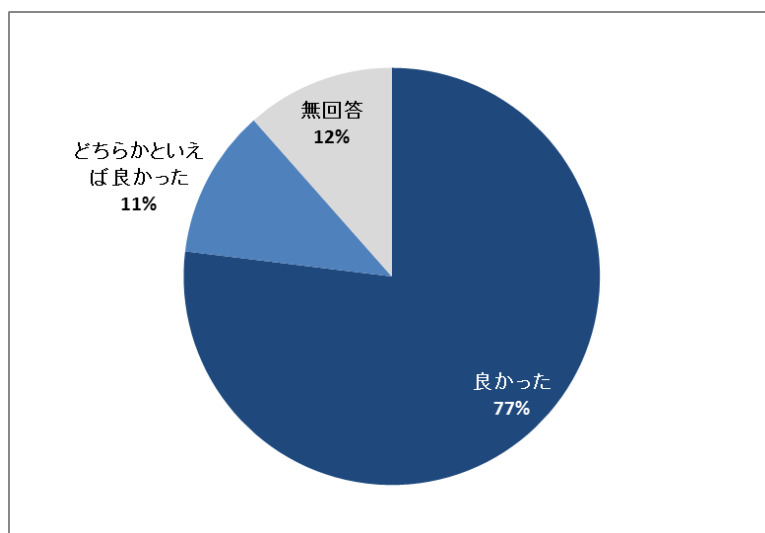
問5 本プログラムで印象に残った点があれば教えてください。(複数回答可)

・ 現地でのフィールドワーク	20名
・ 他研究科の大学院生との交流	18名
・ 他研究科の教員との交流	12名
・ 講義形式以外の演習	12名
・ 他分野の講義内容	10名
・ 専門分野の講義内容	3名
・ その他	1名
・ 無回答	3名



## 問6 全体を振り返ってみて、サステナプログラムを履修して良かったと思いますか？

・ 良かった	20名
・ どちらかといえば良かった	3名
・ どちらともいえない	0名
・ どちらかといえば良くなかった	0名
・ 良くなかった	0名
・ 無回答	3名



### 問6の自由記述例

- ・ 知識の上でももちろんですが、物事の捉え方や考え方がより深くなったと実感しています。私自身、関連する職種につく事は諦めてしまいましたが、日常生活でも諸所において良い影響が出ていると思います。また、もしサステナの講義や演習に参加していなかったら、他学科の人たちと知り合う事もなかった、というのも私にとっては大きな要素です。各自、専門分野は違えど、サステナという一つのつながりでもって演習等に取り組む事ができ、絆を作る事が出来ました。卒業と共に、私は皆とほとんど連絡をとることはなくなってしまいましたが、絆という財産を大切にしたいですし、機会があれば皆で集まりたいです。
- ・ グループワークを通じて、一つの問題に対して全く異なった視点からのアプローチを行うことや、複雑な問題に対して総合的に解決策を提示する体験ができた。そのことで、大規模かつ複雑な問題に対して、幅広く様々な分野の方々の意見と行動を集約する大切さを実感できた。
- ・ 視野が広がったから。専門分野だけ学んでいては見えてこないことがたくさんありました。また、厳しいスケジュールで履修したことも含め、非常にいい経験になったと思います。あんなにもしじみに夢中になったのは、後にも先にもあの夏くらいです（分析者注：国内実践教育演習では酒沼のシジミの調査も行った）。
- ・ 他の研究科の院生と交流できたことや、サステナビリティの理念を知ること、考え方が広がったことと、楽しかったこと。
- ・ 普通の一般教育では取得しえない知識・経験をさせていただきと思っています。「社会人」ではなく「学生」という立場で、様々な経験ができたことは非常に私にとって財産となりました。
- ・ サステナプログラムを通して、今でも連絡をとり、語り合える友人と出会えたからです。教育学部、特に教員養成課程では、みな教員となるのが当たり前であるような中で、他分野で活躍する友人に出会えたことで、大きな刺激を受けました。議論をしたり、今までとは異なる考え方を受け容れられたりするようになりました。正直、地震や海のこと、食糧問題などの講義については、ほとんど身についていないと思います。しかし、サステナプログラムを履修したおかげで、今までは敬遠していたような、そのような理工学っぽい話にも、興味を持って、知ろうとする姿勢になれた気がします。
- ・ このプログラムがなければ出会わなかったであろう人々と、交流を持つことができた。自分の分野以外の人との出会いは、視野を広げることにつながった。
- ・ 他分野の活動を通してグローバルな視点が身に付いたような気がするので良かったと思います。

## 問7 今後のサステナプログラムへの改善点・ご提案などお気づきの点があれば、ぜひご指摘ください。

- ・ このプログラムの一端にも触れていない人は損をしています。せっかく学ぶ機会があるのにもったいない。自分の研究科では聞けない講義や他分野を専門とする方々との交流、他大学との意見の交換は、貴重な財産となりました。今でもふと思い出します。大学院は自分の研究が第一なのかもしれませんが、こういうことは学生のうちでないと経験できません。そして、未来を担う自覚があるのならば、思い考え学び行動すべきです。もっと大々的に「サステナプログラム、やっています！ みんな、一緒に学ぼう！」というアピールをしたほうがよいと思います。
- ・ 全日程ホームステイ（分析者注：タイにおける国際実践教育演習）。やはり、現地の生活を肌で感じられる。
- ・ 他大学との遠隔講義はサステナプログラムを主専攻としていない学生にはレベルが高いと感じた（分析者注：サステイナビリティ学最前線[必修]という講義では他大学との遠隔講義を全編英語で行う）。私はネイティブの英語の発表はほとんど内容を聞き取れず、内容も私の専門ではないため、難しかった。英語の講義や発表も講師や研究員の方の助けによって成り立っているところが大きかった。
- ・ 個人的に遠隔講義は聞いているという実感がなかったので、時間を短くするか、講師の方がいるキャンパスまで出向いた方が良い（分析者注：座学の講義は、水戸キャンパス、日立キャンパス、阿見キャンパスの3キャンパスを繋ぎ遠隔講義システムで行っている。2011年度以降は、講義時間を60分、質疑45分の105分へと変更し、より討論に重点を置いている）。
- ・ 本教育プログラムが「各専門分野に固執しない無限のフィールドでの考え方」という趣旨とした場合、個人的な意見としては、もう少し専門分野に共通した経験をしたいと感じました。（ex.海外における工学系（機械・電気・化学・土木で多少アカデミックな内容）等）
- ・ サステナ新聞があるといいなあと思うしていました。フェイスブックでどんどん配信してください！